紙幣流通の独自の法則について

——不換制の貨幣理論の形成のために——

前畑　雪彦

はじめに
第１章　「金に対する紙幣の代表関係」と「商品価値に対する紙幣の関係」
——紙幣流通法則の二つのエレメントと両者を統一する独自の価値尺度機能——
第２章　紙幣に媒介される商品流通の独自の外観
——金廃貨と数量説・リカード価値章標論の根本欠陥——
第１節　リカード価値章標論
第２節　金廃貨・数量説
第３節　井汲明夫・岩井克人・田中素香，三氏の所説の批判
第３章　紙幣の物神性
おわりに

はじめに

現代資本主義を基本的に規定する社会関係として不換制がある。ここでは，金貨幣やこれと兌換性をもつ銀行券ではなく，通貨当局が輪転機を回すことによって，任意に，無制限に造出可能な，それ自体には価値対象性をもたない不換紙幣が商品流通を媒介している。我々は，日常生活の絶えざる繰り返しにおいて，商品および紙幣の所有者としてのみ流通過程に登場し，労働生産物として価値対象性をもつ商品と，非労働生産物としてそれ自体においてこれを持たない紙幣とを，販売および購買において，交換している。そしてこの体制下において物価の持続的累積的騰貴を経験する。

私は，現代資本主義の貨幣論の課題は，まずは，前の拙論で記したように，次の点にあると考える。「兌換制下における物価の上下波動と，不換制下における物価の持続的累積的騰貴との対照的価格変動を，一貫した理論で，統一的に説明しうる貨幣理論を提出すること」[1)2)]。

1）このテーマと結びついて，不換制を，貨幣関係を媒介とする国家の経済過程への恒常的介入システムの内容において，「一つの現実的な生産関係」（久留間健「マルクス紙幣減価論の理解のために」『立教経済学研究』第21巻３号，1967年，10ページ）として，現代資本主義存立の根本条件に位置づけることが，現代貨幣論の基本課題と考えられる。これなしには，例えば，日銀法の改正をめぐって，種々議論されてきた国家と日銀との関係や，その役割についての，経済学的判断は下せないのであっ

本稿のテーマもまた，マルクス貨幣理論に立脚して，この点にある。本論文では，章に掲げた三つの問題を扱う。これによって，インフレーション研究者に常識化している過剰流通説——これはやがて明らかとなるように，リカード数量説と同一の構造をもつ——の批判と，「貨幣を流通手段としてのその流動的形態に孤立させ」[3]，「紙幣を貨幣の最も完成した形態だと宣言する」[4] 反重金主義の古典派金廃貨論と，その数量説との，現代日本版である，井汲明夫氏の「紙幣量価格」説[5] と岩井克人氏の「貨幣形態Ｚ」[6] 説とを，前稿[7] に引き続き，批判した

て，アメリカ連邦準備銀行やブンデスバンクやヨーロッパ中央銀行等との比較だけの評価ではまったく不十分である。また，通貨価値の守護神として，あるべき姿や理念について語るだけでは，不換制下の中央銀行が必然的なものとして果たす客観的機能を解明したことにはならない。そして自由化・国際化の進展によって，不換制下の各国金融市場を動き回る，利子生み資本としての貨幣の国際的投機活動は巨大化し加速化して，それだけ各国国民経済に及ぼす覚乱的作用も増大する。これに対して，国家権力の執行者である各国政府が機動的対応策を講じるのは，あるいは中核的資本主義国が柱となる国際的連携策を模索するのは必然である。また資本主義の市場メカニズムは，とりつけによって兵庫銀行等の破綻が生じたことに見られるように，本質的にカタストロフィーを含んでいる。従って，信用危機に際して，日銀特融の発動は不可避である。そして政府による財政・金融政策を用いての有効需要政策は，この間，実際に行なわれたように，必然である。これらのための資本主義にとっての最終的装備が国家介入機構としての不換制である。こういった点を無視して，流行の通俗的マーケットメカニズム万能論に立脚して，言い換えれば，中央銀行を古典派的意味での単純な流通手段供給機構と見ることによって，日銀の国家からの独立化を主張することは空論と言えよう。また，この認識によっては，現代資本主義の変革において，不換制がどのような新しい条件を用意しているのかを解明することはできないであろう。

2）拙稿「不換制の貨幣理論——紙幣流通法則——」（『桜美林エコノミックス』第36号，1996年12月）1－2ページ。以下引用に際し，発行順に，これを拙稿Ⅲとし，次のものをそれぞれ拙稿Ⅰ，拙稿Ⅱとする。「不換制下における価値尺度機能の独自性——金廃貸論・貨幣数量説批判——（上）」（同上，第32号，1994年12月）——拙稿Ⅰ。「不換制下の価値尺度と度量標準——紙幣流通法則の理解のために——」（同上，第34号，1995年12月）——拙稿Ⅱ。

3）『経済学批判』国民文庫版，訳，246ページ。以下同書からの引用はこれによる。

4）同上。

5）井汲明夫「試論——紙幣流通と価値表現」（『城西経済学会誌』第21巻第2・3号，1985年12月）。氏はこの中で，専一的紙幣流通の観察にもとづいて，次のように述べている。「貨幣はその本性においてそれ自身の自然的属性としての使用価値から自由でなければならないのに，価値物としての内実を求められるかぎりでは商品として，即ちまず第1に使用価値として生産されなければならない。ここに貨幣の本質的矛盾がある。／貨幣は商品から発生しながら，貨幣機能にとっては商品性の担い手である使用価値はむしろ桎梏となる。……自己の概念に相応しくなるために貨幣機能は自分自身の使用価値から開放されるのがむしろ自然である」（同上，88ページ，傍点引用者）。「貨幣機能は，初めは物的形態を取って現われざるを得ないが，次いでその機能自体が物的形態を桎梏として放棄する。紙幣はそれが紙という使用価値から出来ていることには何の重要性もないのだから，事実上物的形態を放棄している。紙幣は通常マルクス経済学者達によって考えられているよりも，遥かに貨幣の本質に根ざす存在である」（同上，87ページ）。

6）岩井克人『貨幣論』（筑摩書房，1993年）。氏は，この書で，商品流通の無限の連鎖としての悪循環過程において，流通手段として機能する紙幣の素材的観察から，すなわち価格形態を脱落させた諸使用価値の，紙幣を仲立ちとする交換と，紙幣片の一方的通流を目撃することから，これらを価値形態

いと思う。また，岩井説に賛同された田中素香氏の見解[8]もとりあげることにする。

第１章　「金に対する紙幣の代表関係」[9]と「商品価値に対する紙幣の関係」[10]
――紙幣流通法則の二つのエレメントと両者を統一する独自の価値尺度機能――

インレーション研究において，常識化している「流通必要金量をこえる不換通貨の流通」説[11]は，これから明らかにするように，これを唱える研究者の意図に反して，マルクス紙幣流通法則をリカード「過剰流通（übervoller Zirkulation）」[12]論，すなわちその貨幣数量説へ変質させることによって，現代不換制下の貨幣問題解明のための，その有効性を否定する。こうなった理由は，この過剰流通説が，紙幣流通法則の表記の二つの側面，すなわち「金に対する紙幣の代表関係」において与えられる紙幣の金章標の規定と，「商品価値に対する紙幣の関係」において与えられる紙幣の価格章標の規定とを，区別において明瞭に認識することなく，それを単に，リカードと同様に，「一面的に」[13]，前者の規定においてのみ研究することによって，これら位相の異なる紙幣の二規定を統一する，紙幣流通法則に内在的な価値尺度機能を，度量標準という本来副次的な問題への執着によって，明晰に把握することができなかったらである[14][15]。

の展開と混同して，一般的価値形態Ｃと全体的価値形態Ｂとの悪循環形態である貨幣形態Ｚなる珍妙を考案する。その上で，次のように述べる。「ある商品が貨幣という役割をはたしているとしたら，それはそれが無限の「循環論法」としての貨幣形態Ｚのなかで貨幣の「位置」を占めているからにすぎないのである。貨幣が貨幣であるのは，それが貨幣であるからなのである。……貨幣という存在は，貨幣形態Ｚのなかで貨幣の位置を占めつづけていることさえできれば，それ自体が実体的な価値をもつ商品である必要はいっさいない。まして，それは金という特殊な商品である必要もない。……貨幣単位〔失礼ながらこれは何んですか？〕を刻印された銅や鉄や鉛やアルミニウムといった安っぽい金属のかけらでも，貨幣単位を印刷されたなんの役にもたたない一枚の紙切れでも，さらにはコンピューターの記憶装置に電磁気的に書きこまれ貨幣単位の情報コードでも，貨幣として社会的に認められていさえすれば貨幣としての機能をはたすことになる。それが，いわゆる鋳貨であり，紙幣であり，エレクトロニック・マネーにほかならない。いや，貨幣という存在はその商品としての価値が希薄になればなるほど貨幣としての純粋性を増していく」（同上，64－65ページ，傍点ならびに〔　〕内引用者）。

7）拙稿Ⅲ参照。

8）同氏「価値形態論とインフレーション理論――岩井克人『貨幣論』に対する批判的評注――」（研究年報『経済学』（東北大学）Vol.55 No.4 January 1994）。

9）『資本論』第Ⅰ巻，大月書店版，訳，166ページ。以下，同書からの引用はこれによる。

10）同上，訳，167ページ。

11）拙稿Ⅰ，「第２節　紙幣の商品価値に対する関係」ならびにそこに付した注７参照。

12）『経済学批判』訳，244ページ。

13）同上，訳，158ページ。

14）拙稿Ⅰ・Ⅱ参照。

15）考究に支えられた用意周到な説明と，重要点への注意の換起と，不換制の貨幣問題解明への理論的

そこでこの二規定と価値尺度機能の媒介によるそれらの統一について，まず考察してみよう。最初に，「金に対する紙幣の代表関係」という場合の金の形態規定と，これにもとづくこの金に特有な性格とを確認しておきたい。これはW－G－Wの流動的統一における中間項の金という形態規定にある[16]。そしてこの規定にもとづいて，この金は流通手段の「第2の観念化」[17]を実現した金という性格をもつ。「貨幣の機能的定在が貨幣の物質的定在を吸収」[18]した金である。これはそこに極印してある「名目的実質」[19]においては完全であるが，この名目に照応する「金実体」[20]を持つ必要のない金である。この意味において，紙幣と代表関係に立つ金，したがってその総量である流通必要金量は実体概念ではない。それは「仮象の金」[21]である。そして「名目的実質」を極印してあるだけの「仮象の金」に対して，これと同一の貨幣名目を印刷してあるだけの紙幣が代表的関係に立つ。代表されるものとするものとの関係は，共に価値実体をもたない名目量同士の「観念的な数的関係」[22]である。この点は次のことを考えればただちに理解できるはずである。紙幣で代理できる流通必要金量が1兆円で，これがすでに1兆円紙幣で代替されている時に，別の1兆円紙幣がこれに追加される場合である。この場合には，流通必要金量は1兆円紙幣という形態でのみ存在していたのである。そして追加投入によって紙幣総量は2兆円に膨脹するのであるが，これが，先に，紙幣の形態でのみ存在していた1兆円の金量と代表関係に立つ。すなわち価値実体をもたない名目量同士の「観念的な数的関係」は，現在の紙幣流通の体制においては，共に貨幣名目を印刷してあるだけの紙幣量に対する紙幣量の関係として，純粋金属流通過程とは対照的な目に見える形で，その時と同様に，生きた現実の関係として，我々の前にある。

示唆において，現在までの所，マルクス貨幣理論の解説として，第1級のものと見られるのは，三宅義夫氏の「貨幣または商品流通」（『資本論体系　2　商品・貨幣』「第1編第3章」種瀬茂，富塚良三，浜野俊一郎編集，有斐閣，1984年）である。しかしそれは同時に，誠実で良心的なそして現実感覚にあふれる，氏のマルクス貨幣論理解の到達点と限界をも正確にさし示している。その一つが次の点である。氏は，流通必要金量を価値によって規定する修正理論を明快に批判して，価格規定の重要性を説明する。それにもかかわらず，価格章標の独自の意義，したがってまた本文に指摘した紙幣の二規定については，その存在さえ触れられていないのである。そしてこの点が，不換制下の価値尺度問題についての，この解説中に見られる氏の微妙な動揺，すなわち価値尺度機能麻痺論につながる一つの原因になったと思われる。

16）拙稿「インフレーションの進行過程について――有効需要政策の意義と限界――」（『立教経済学研究』第43巻第1号，1989年7月）「第1章　紙幣がそれによって代理できる流通必要金量とは？」参照。

17）『経済学批判』訳，140ページ。

18）『資本論』第Ⅰ巻，訳，169ページ。

19）『経済学批判』訳，147ページ。

20）同上，訳，150ページ。

21）同上，訳，140ページ。

22）同上，訳，157ページ。

インフレーション研究者の一部より以前から執拗にくり返されてきた流通必要金量の実測の主張と，この不可能からの金廃貨の宣言は，流通必要金量を，J・ロックと同様に，実体概念としてのみ理解しているのであって，この「観念的な数的関係」の無理解から発せられるものである。なぜなら，価格によって規定される流通手段の「名目的実質」は，すでに$\frac{PT}{V}=M$として厳格に計算されており，改めて計測される必要はないからである。それは現存流通必要紙幣量という形で，明示的な量として存在している[23]。

さらにつけ加えれば，流通必要金量を実測することは，純粋金属流通においても，事の性質上，不可能である。完全量目と最軽量目規定との間で，個々の金鋳貨の「名目的実質」と「実在的実質」[24]との公差は千差万別であり，一国の金鋳貨総量を一々秤にかけ，それらを合算することは，実際には，不可能だからである。そもそも最軽量目規定は「仮象の金」を事実として承認するものである。そして金の鋳貨形態は，一々の取引における試金とその計量とを取り除くためのものである。そして金が鋳貨形態に鋳造されることによって，すなわち金に極印された名目とその形状とが，金重量を金鋳貨形態で明示することによって，地金では生じえない金の仮象化，「名目的実質」の「実在的実質」からの独立化が起きるのである。紙幣と代表関係に立つ金は，実測主張論者が理解する「実在的実質」ではなく，「名目的実質」である。そして「実在的実質」は，$\frac{PT}{V}=M$によっては，また実際にも，算出されない。

法定度量標準を1円＝金750mgとして，「金に対する紙幣の代表関係」と言う場合の金に，この金に極印してあるのと同一名目を印刷してある紙幣が，2倍投入されたと仮定してみよう。そうすると，「金に対する紙幣の代表関係」1対2から，流通手段規定にある1円紙幣の代表金量は375mgに半減する。そしてこの円紙幣減価を原因として，反作用的に，価値尺度規定にある貨幣名円の表示する金量が減少し，円は，事実上，375mgの金量の貨幣名となる。したがって，前に，紙幣と代表関係に立つ金を，その価格を媒介に規定していた同じ商品価値は，今度は，半減した金量によって半減した価値をもつ円で，価値尺度され直す結果，2倍に騰貴した価格が付与されることになる。例えば，以前に1円であった同じ商品価値は，今では，2円となる[25]。こうして，金に対して2倍投入された紙幣量と2倍へ騰貴した価格を持つ商品との間に，「商品価値に対する紙幣の関係は，ただ紙幣によって象徴的感覚的に表されているのと同

23）拙稿Ⅲ，注26参照。

24）『経済学批判』訳，140ページ。

25）この場合，価値尺度としての円は，流通する商品の価値に騰貴した価格規定を与えるばかりではなく，この範囲を越えて，あらゆる「物を価値として，したがって貨幣形態に，固定することが必要なときには，いつでも計算貨幣として役だつ」（『資本論』第Ⅰ巻，訳，133ページ）ことができる。例えば，国内総生産や国富もこの低下した価値をもつ円で計算されて，統計が作成されることになる。すなわち不換制下では，観念的貨幣円の価値は，現存実在円紙幣の価値によって決定されるのに，この円で，商品の価値や国富等が表現される場合には，1片の円紙幣も必要ではないという一見奇妙な構造が存在するのである。

じ金量で商品価値が観念的に表されているということにあるだけである」[26] という関係，あるいは「紙幣と商品との間に存在する関係は，ただたんに，商品価格のうちに観念的に表現されている金の同じ量が，紙幣によって象徴的に代表されている」[27] という関係，つまり　商品価格＝紙幣　の同等性関係が成立する。そして，これによって，右辺の紙幣は，左辺の「諸商品に対しては，それらの価格の実在性を代表しているのであって，signum pretii 価格の章標である」[28] という規定を与えられることになる。そうであるのは，「諸商品の価値が価格に表現されているから」[29] であり，そしてこの価格規定は，今では，半減した価値をもつ円で価値尺度された結果として与えられているからである[30]。

紙幣は価格の章標として，それと同一の商品価格を実現することによってのみ価値をもつ。つまり「紙幣は流通するから価値をもつのである」[31]。それは流通から切り放されれば，すなわちW—G—Wの過程的統一の無限のからみ合において，購買手段の形態で，それと同等量の商品価格を実現する仕方で，通流運動をしなければ，「紙幣はなんの価値もない紙くずに転化する」[32]。紙幣が過剰に投入された場合に，紙幣と同一量の価格を実現する仕方で，通流することによって，紙幣が価値をもつことの条件が，紙幣流通法則の中に含まれている価値尺度機能によって与えられる新たな価格規定，つまり騰貴した価格である。「紙幣流通に独自な法則（*Ein spezifiches Gesetz der Papierzirkulartion*）」[33] とは，文字通り，紙幣に独自な流通についての法則であって，それ自身に，増加した紙幣が，騰貴した価格を実現する仕方で，購買手

26）『資本論』第Ⅰ巻，訳，167ページ，傍点引用者。

27）『フランス語版資本論上巻』（江夏美千穂・上杉聰彦訳，法政大学出版局，1979年）108ページ，傍点引用者。

28）『経済学批判』訳，148ページ。傍点引用者，圏点はマルクス。この部分でマルクスは，価値章標（紙幣）を，これが代表する金との関係において，金章標と規定し，次に，方角を転じて，本文引用のごとく，商品に対する関係において，価格章標と規定している。これについては次章で立入る。ここで次の点を注意しておきたい。一方的G－W（一方的商品変態）のGは，紙幣の代理根拠にかけているが故に，この金は紙幣によって代理できない。すなわち紙幣は，この金に対する関係においては，金章標の規定を受けとらない。従ってまた，この紙幣は，商品に対する関係においても，価格の章標の規定を受けとらない。すなわち両規定は，W－G－Wの動的統一の中間項に位置する同一紙幣についての，方角を異にする二つの規定である。この点が見失われ，かつ，印刷されたばかりの紙幣による国家の購買（あるいはこれを代行するものの購買）が，非範疇的な購買であることが見落とされると，国家のこの行為は，流通外の行為として，また，「無価値な紙幣による流通からの価値の一方的収奪」（久留間健，前掲論文，1ページ）として，国家の「機械的行為」（『経済学批判』訳，155ページ）であることが理解できなくなる。前掲拙稿「インフレーションの進行過程について」の「第3章　国家の機械的行為」参照。

29）同上訳,148ページ。

30）拙稿Ⅰ・Ⅱ参照。

31）『経済学批判』訳，157ページ。

32）同上，訳，155ページ。

33）『資本論』第Ⅰ巻，訳，166ページ。

段の形態で，価値をもって流通するための，「理論的準備過程」[34]，すなわちそれに独自の価値尺度機能を内蔵しているのである。

このようなメカニズムにおいて，紙幣流通法則は，専一的紙幣流通の体制下における，貨幣流通法則の貫徹形態となる。これによってマルクス貨幣理論は，兌換制下の物価の上下波動と，不換制下の物価の持続的累積的騰貴との対照的価格変動を，一貫した理論で，統一的に説明する一般理論となる。

紙幣は，それが過剰に投入された場合に，「金に対する紙幣の代表関係」において，減価した金章標の規定を受けとる。そしてそれから，紙幣は，紙幣流通法則のエレメントである価値尺度機能の媒介によって，「商品価値に対する紙幣の関係」において，　騰貴した商品価格＝増加した紙幣量　として，左辺の「価格の実在性を代表する」ものとして，価格章標の規定を受けとるのである[35]。

流通過程において，我々が実際に目撃するように，例えば1000円の価格を持つX量の商品Aが，千円紙幣で購買されるというように，紙幣は，常に，それと同等量の商品価格の実現に必要なものとしてのみ流通する。それは決っして過剰なものとしては流通しない。そしてこの現実の下に，インフレーションが生じるのである。

「流通必要金量を越える不換通貨の流通」説は次のことに帰着する。流通必要金量は，販売される個々の商品価格の社会的合計つまり価格総額によって規定され，流通必要金量と価格総額とは同等量であるから，過剰流通紙幣は価格総額を越えて，価格を持たない商品と対面して流通すると同時に，この紙幣は，金に対する紙幣の過剰部分の性格において，金章標としての価値規定を持たない。つまり過剰流通説は，価格を持たない商品と価値を持たない紙幣との

---

34)『経済学批判』訳，77ページ。

35)「金に対する紙幣の代表関係」が1対1であり，紙幣が，単に，貨幣流通法則を反映しているだけの状態では，金章標としての紙幣の規定と，価格章標としての紙幣の規定とは，直接的に同一である。しかし，金に対する紙幣の適切な比率の侵害が生じると，両規定は分烈し，本文に述べた仕方で，紙幣流通法則のエレメントである価値尺度機能が働くことによって再び，統一される。紙幣流通の独自な法則が作動するのである。言い換えれば価値法則が貫徹する。このプロセスは，「新しい価値関係への商品の市場価格の適合の過程として」（久留間健「独自な物価騰貴としてのインフレーションの概念規定のための一試論」『金融論研究――渡辺左平還暦記念論文集――』法政大学出版局，1964年，94ページ）需給が媒介する。この場合，紙幣流通法則が作用するこれに固有の市場構造において，すなわち古典派経済学が理解するのと同一の，商品対商品の実物バランスの市場構造において，すべての紙幣所有者は，紙幣の人格的担い手として，商品を追走する購買者の資格で，紙幣流通に独自の法則を，実践的に執行する。つまりこの競争戦を戦いぬくことになる。そしてこの帰結として，減価した観念的貨幣，例えば価値を減じた円に適合する新たな価格水準がもたらされる。これについては別稿で論じる。

なお，誤解のないように付言しておくが，国家の「機械的行為」をもってはじまるインフレーションの全進行過程が，古典派と同一の市場構造において展開するといっているのでは全くない。これについては前掲拙稿「インフレーションの進行過程について」を参照されたい。

「頭のなかででっちあげられた機械的等置」[36]を想定するのであり，すでに拙稿Ⅲで井汲氏の「紙幣量価格」説と岩井克人氏の「貨幣形態Ｚ」説の批判で明らかにした，幻想の同等性関係，商品＝紙幣　を内容とするのである。このようなものとして，それは，シンプルであるが故に，数量説の本質を端的に示す原始的貨幣数量説である[37]。また，この説が，過剰流通の媒介によって商品価格を騰貴させ，それを通じて，過剰紙幣は必要紙幣へ転化すると主張する限りでは，過剰流通説は，次章で明らかにするように，リカード数量説と同様の構造をもつ。

過剰流通説が数量説に帰結するのは，商品と紙幣との間の法則的な関係であり，現実の関係である　商品価格＝紙幣　の同等性関係から，「紙幣量価格」説や「貨幣形態Ｚ」説と同様に，それが価格規定を脱落させるからである。そしてこうなったのは，これまでの研究が，「金に対する紙幣の代表関係」において与えられる紙幣の金章標の規定と，「商品価値に対する紙幣の関係」において与えられる紙幣の価格章標の規定を明晰に区別することができず，実質的には，それを単に「一面的」に，前者の性格においてのみ研究することによって，両者を統一する紙幣流通法則のエレメントである価値尺度機能を，本来二次的な度量標準問題への束縛によって，把握しそこなったからである。

第２章　紙幣に媒介される商品流通の独自な外観――金廃貨と数量説・リカード価値章標論の根本欠陥――

第１節　リカード価値章標論

価格をもたない商品と価値をもたない貨幣との「頭の中ででっちあげられた機械的等置」を本質とする金廃貨論と貨幣数量説とは，次のような異なった流通機構とこれに結びついた相互に区別される特徴的な物価変動にもかかわらず，一様に，成立する。金属流通と富鉱の発見のもとで生じた半世紀にもわたる長期的な物価上昇。これを説明するヒューム流通理論[38]。不換

36）『経済学批判』訳，216ページ。

37）「商品価格は流通手段の量によって規定され，流通手段の量はまた１国に存在する貨幣材料の量によって規定される，という幻想は，その最初の代表者たちにあっては，商品は価格をもたずに流通過程に入り，また貨幣は価値をもたずに流通過程にはいってきて，そこで雑多な商品群の一可除部分と金属の山の一可除部分とが交換されるのだ，というばかげた仮説に根ざしている」（『資本論』第Ⅰ巻，訳，160－１ページ，傍点引用者）。これは，原始的であるが故に，展開してゆく数量説の本質をもっとも直截に表している。それ故マルクスは次のように言う。「「諸物の価格は，根本的には，つねに貨幣章標の総量にたいする諸物の総量の比率によって定まるのである。」（モンテスキュー『法の精神』……）リカードやその弟子のジェームズ・ミルやロード・オヴァストンたちによるこの説のいっそうの展開」（『資本論』第Ⅰ巻，訳，162ページ）。

38）この場合の金廃貨論と数量説とは次の意味においてである。金は労働生産物として価値対象性を持ち，従って商品価値との関係で，一定量しか流通過程に入り込み得ないのに，金は内在的価値を持たずいくらでも流通過程に入り，この中でのみ価値を持つと考える，つまりそれを紙幣と同一物と見な

銀行券流通とスレッドニードル街の紙幣印刷機のもとで発生した紙幣減価と，これと時を同じくする物価騰貴。この現象を説明すると同時に，金属流通に対しても同様に妥当すると主張された[39]，一般理論としてのリカード価値章標論[40]。兌換銀行券流通とイングランド銀行の信用創造能力を与えられもとで起きた，物価の激烈で暴力的な上下波動。これの調節案として実施され，失敗した通貨原理。したがって，ヒューム，リカード，通貨原理の幻想は，これらが対象とする相互に区別されるそれぞれの流通機構の特殊な正確と，これに結びついたこれらに固有な物価変動の特徴からばかりではなく，これらの諸説が共通に土台とする古典派経済学の反重金重商主義的な自由主義流通理論の一般的性格[41]からも生じ，したがって，これらの諸学説

し，紙幣に固有の現象に支配されるという意味での金廃貨ならびに数量説である。「貨幣を流通の結晶した産物としての形態規定性だけでしっているにすぎない重金主義と重商主義に対立して，古典派経済学がそれをなによりもまずその流動的形態で，商品変態そのものの内部でつくりだされてはまた消えさる交換価値の形態として把握したのは，当然至極なことであった。だから商品流通がもっぱらW－G－Wの形態で，この形態がまたもっぱら販売と購買との過程的統一という規定性で把握されるように，貨幣は，貨幣としてのその形態規定性に対立して，流通手段としてのその形態規定性において主張される。流通手段そのものが，鋳貨としてのその機能において孤立させられると，すでに見たように，それは価値章標に転化する。だが，古典派経済学は，まずもって流通の支配的形態としての金属流通に対面したのであるから，金属貨幣を価値章標としてとらえる。そういうわけで，価値章標の流通の法則に照応して，商品の価格は流通する貨幣の量によって決まるのであって，その逆に流通する貨幣の量が商品の価格によって決まるのではない，という命題が打ち立てられる」（『経済学批判』訳，209－210ページ，傍点引用者）。

39）「リカードが純粋な金属流通の諸法則を発見したという独断」（同上，訳，243ページ）。

40）「貨幣をただの価値章標だと説明するリカード」（同上，訳，224ページ）。

41）「古典派経済学は，商品の流通過程をもっぱらW－G－Wの流動的統一の形態でのみ把握し，したがって貨幣を流通手段としての規定性においてのみ理解する。それは，また，個別資本の循環を生産資本の循環形態P…W′－G′－W…Pにおいてのみ解釈し，市場を一個の完結的全体において問題とする場合には，それは商品対商品の構造からのみ成り立つと判断する。すなわち古典派経済学は，流通過程をそのすべての次元にわたって，実物バランスの体系として抽象的に解釈し，貨幣をそれらの交換を単に形式的に媒介する流通手段にすぎぬものと孤立化させるのである。そしてここから彼らの貨幣数量説，貨幣ヴェール観，セー法則が一般理論として主張されることになる。しかしこれらはすべて間違いである。商品の流通過程は，両面的商品変態であるW－G－Wの過程的統一とならんで，一方的G－Wと一方的W－Gとの一面的商品変態を不可欠の構成要素とし，商品流通に必要とされる実在的貨幣は流通手段プラス蓄蔵貨幣でなければならず，また両者の相互的機能変化は不可避である。個別資本の循環過程は，貨幣資本循環形態，生産資本循環形態，商品資本循環形態として存在し，そして市場を一個の完結的全体として考察する場合には，それは，商品対商品の構造と並んで貨幣対商品の構造を不可欠の構成契機とするのである。そして後者では，貨幣そのものが，商品と並んで，社会的再生産過程の現実の均衡条件そのものを形成するのである」（伊藤武編著，鶴野昌考・前畑雪彦著『貨幣と銀行の理論』八千代出版，第2版，1995年，140－1ページ）。そしてこの現実の均衡条件としての貨幣（これは第3規定の貨幣である）の大きさは，それ自身，有効需要の大きさであり，これは資本としての貨幣（Geld als Kapital）の性格において，利潤率，利子率，将来の市場見通しによって，その大きさを変え，従って，この独立的需要要因としての貨幣は，将来の生産規模のみならず，これに対面する供給量（商品）に作用し，このための生産量，従って雇用量に対して乗数的効

は，この特殊と一般との結合物として，具体的に理解されねばならぬであろう[42]。

リカード価値章標論すなわちその数量説は，ヒューム理論の精密化[43]であり，通貨原理はリカードの発展ではなく，その単なる応用である[44]から，リカード学説はこの特殊と一般との具体的結合物の典型と見なせよう。

ここでは，この典型的な幻想的流通理論の考察によって，次の点を明らかにしたい。リカードは，紙幣流通の諸現象から彼の貨幣論を組み立てる[45]が，彼の失敗は，本来，専一的紙幣流通の領域に限局されるべき価値章標の理論を不当に拡大し，これを金属流通の領域にも及ぶ一般理論として展開した点にあるのみではなく，事実上，それが固有の対象領域とする紙幣流通の諸現象の説明理論として，限定してみた場合においても，そこに根本的な難点があるということである。それは彼の価値章標論が，「金に対する紙幣の代表関係」においてのみ，価値章標の規定を与え，「商品価値に対する紙幣の関係」すなわち　商品価格＝紙幣　の関係において与えられる，価格の章標としての紙幣の規定を欠いている点である。そしてここから数量説と金廃貸の幻想が展開される。彼は，紙幣が媒介する商品メタモルフォーゼに特殊の外観と，その伝統的な反重金主義，ならびに，商品の価値形態つまりその価格形態を「どうでもよいとみなす」[46]古典派経済学に一般的な「根本欠陥」[47]とにわざわいされて，価格章標としての紙幣の規定，そしてかかるものとしての金章標の規定を見失うのである。したがってリカード価値章標論は，それを紙幣流通の諸現象を説明する理論と限局した場合には，前章で見た日本のインフレーション研究者がこれまで解釈してきたマルクス価値章標論と基本的に同一なのである。言い換えれば，過剰流通説論者は，マルクスの「紙幣流通に独自の法則」をリカード数量説へ変質させて把握してきたのである。本節はこの点を解明する。

果をもって規定的に働く（拡大の方向にも縮少の方向にも）のである。以上については，上記の「第2編　資本の流通過程と貨幣資本」参照。

42）重金主義を淵源とする貨幣的経済理論（これは流通手段と区別しての第3規定の貨幣を資本と混同する）と数量説（これは貨幣をすべて第2規定とみなす）との，マルクス以降の「抽象的対立」――ケインジアン対マネタリストの対立はこれである――を，資本主義的生産の発展段階によって内容づけられた流通過程とそれに個有の流通現象との関連において，両者とも貨幣の第1規定を見失うという共通の欠陥とともに，批判的に位置づける仕事は，興味ある重要な課題と考えられる。

43）「リカードはヒュームの理論を精密にした」（『経済学批判』訳，221ページ）。

44）「19世紀中の諸商業恐慌，とくに1825年と1836年の大恐慌は，リカードの貨幣理論の発展をもたらしはしなかったが，しかしその理論の新しい応用をよびおこした」（同上，訳，243ページ）。

45）「強制流通の諸現象を金属流通の法則で説明すると称しながら，じつは逆に，後者の法則を前者の諸現象から引き出している。……〔リカード〕の頭を支配していた事実は，紙幣の減価と，それと時を同じくする諸商品価格との騰貴とである。ヒュームの場合のアメリカの諸鉱山にあたるものは，リカードの場合にはスレッドニードル街の紙幣印刷機であって，リカード自身もある個所で，この二つ要因をはっきり同一視している」（同上，訳，223－224ページ，傍点引用者）。

46）『資本論』第Ⅰ巻，訳，108ページ。

47）同上。

最初に，リカードが，はじめは，価値章標を「金に対する紙幣の代表関係」において価値を与えられる，金章標と把握していながら，次には，金そのものを価値章標と理解することによって，価値章標の理論を，それに固有の紙幣流通の領域から，金属流通の領域にまで不当に拡張する点を見ておこう。

「リカードは，まず金銀の価値を他のすべての商品の価値と同様に，それらに対象化されている労働時間の量によって規定する。あたえられた価値をもつ商品としての金銀で，他のすべての商品の価値が測られる〔貨幣としての金銀ではなく，商品としての金銀で他の商品の価値が測られると述べている点は重要である。金銀で価値が測られることは，リカードにあっては，貨幣の機能として，その価値尺度としては，自覚されていないのである。言い換えれば，彼にあっては，金は，流通手段として流通するという理由だけから貨幣なのである。後のマルクスの文章も注意されたい〕。さて，1国における流通手段の量は，一方では貨幣の度量単位の価値によって，他方では諸商品の交換価値の総額によって規定されている。この流通手段の量は支払い方法での節約によって修正される。こうして，与えられた価値をもつ貨幣が流通することのできる量は一定しており，また貨幣の価値は流通の内部ではその量だけに現れるのであるから，貨幣の単なる価値章標は，もしも貨幣の価値によって規定された割合で発行されるならば，流通のうちで貨幣に置き変わることができる。「流通する貨幣がまったく紙幣だけからなり，そしてその紙幣が，それが代理するはずの金と等しい価値をもつならば，この通貨は最も完全な状態にあるのである。」／だから，これまでのところでは，リカードは，貨幣の価値を与えられたものと前提したうえで，流通手段の量を諸商品の価格〔この価格規定は，私の挿入部分のマルクスの文章から明らかなように，貨幣としての金銀ではなく，商品としての金銀によって与えられている〕によって規定しているのであって，価値章標としての貨幣は，彼にとっては，一定量の金量の章標を意味し，ヒュームの場合のように，諸商品の無価値な代理物ではない。／リカードが，なめらかにすすめてきた叙述を突然うちきって逆の見解に変わる〔すなわち，今までは，紙幣を内在的価値をもたない単なる価値章標であり，その価値は内在的価値をもつ金から与えられると考えてきたのに，これからは，反対に，金自体を内在的価値をもたない紙幣と同一物と見なす，ヒュームと同じ見解に変わる〕ところで，彼は，……無関係な視点を持ちこんで問題を混乱させてしまう。われわれは，彼の考えの内面的表明をたどって，まずすべての人為的な付随的な論点を除外することにしよう。……／これまでリカードの述べたところから生じる唯一つの命題は，金の価値が与えられている場合には，流通する貨幣の量は，諸商品価格〔商品としての金銀によって与えられる価格〕によって規定されている，ということである。だから，あたえられた瞬間には，一国内に流通する金の量は，単純に，流通する諸商品の交換価値によって規定されている。いまかりに，より少量の商品がもとのままの交換価値で生産されたためか，または労働の生産力が増加した結果，同一量の商品がより少ない交換価値をもつことになったために，この交換価値の総額が減少するものとしよう。……この場合

に，流通する金属の与えられた量はどうなるか？　もしも金が，流通手段として流通するという理由だけから貨幣であるならば〔この文言は，最初の注釈挿入部分の文言と対応していると考えるべきである〕，もしも金が，国家の発行する強制通用力のある紙幣のように，流通にとどまることを強制されたものであるならば（そしてリカードが考えているのは，これである），流通する貨幣の量は〔こ〕の場合には，金属の価値にくらべて過剰となり，……金は，それ自身の価値をもっているにもかかわらず，……それ自身の価値よりも低い交換価値をもつ金属の章標となり，……金は価値章標として，……その実際の価値を下回…〔る〕であろう（これもまた，強制通用力をもつ紙幣からの抽象である）。…〔こ〕の場合には，諸商品が金よりも低い価値をもつ金属で評価されたのと同じことになろう。だから，……商品価格は騰貴……するであろう。〔こ〕の場合……商品価格の運動，……その騰〔貴〕は，流通する金量が，金自身の価値に照応する水準以上……に，すなわち金自身の価値と流通させられるべき諸商品の価値との比率によって規定されている正常な量以上……に，相対的に膨脹……する結果であろう。／同じ過程は，流通する諸商品の価格総額は不変のままであるが，しかも流通する金量が正しい水準……以上になった場合にも生じるであろう。……〔これが〕生じうるのは，……鉱山からの新しい供給が流通の需要を上回るときである。……〔こ〕の場合に，金の生産費すなわちその価値は同一不変と前提されている。／要約しよう。流通する金は，それが実際に含んでいる価値よりも……小さい価値の価値章標である。……諸商品が一般的に貨幣のこの新しい価値で評価され，一般の商品価格がそれに応じて騰貴……してしまえば，流通する金の量は流通の需要にふたたび照応することになろう（これはリカードがとくに満足して力説した帰結である）が，しかし貴金属の生産費とは，したがって商品の貴金属のその他の諸商品に対する関係とは矛盾することになろう」[48]。

以上のマルクスの説明から明らかなように，紙幣についての理論が，金自体が，ヒュームと同様に，内在的価値をもたない価値章標と考えられることによって，その固有の領域を越えて，金属流通に対しても妥当させられたならば，内在的価値をもつ金が，一方ではかかるものとして，他方ではその正反対物として規定されることによって，絶対矛盾に陥り，破綻することは，自明である。

しかし，リカード理論を，その正当な説明領域，紙幣流通の領域に限局させた場合には，彼は，「流通する貨幣がまったく紙幣だけからなり，そしてその紙幣が，それを代理するはずの金と等しい価値をもつならば，この通貨はもっとも完全なる状態にある」と述べていることから明らかなように，またマルクスが「これまでのところでは，……価値章標としての貨幣は，彼にとっては，一定量の金量の章標を意味し，ヒュームの場合のように，諸商品の無価値な代理物ではない」と説明しているように，それ自体としては無価値な紙幣を，「金に対する紙幣

48）『経済学批判』訳，224－228ページ，傍点，〔　〕内引用者，圏点はマルクス。

の代表関係」において価値を与えられる金章標と，正確に，規定しているのである。そして，紙幣が「スレッドニードル街の紙幣印刷機」によって，この金に対して過剰に発行されるならば，この金との代表関係において紙幣減価が生じ，物価が騰貴すると，リカードは説明しているのである。すなわち「国家の発行する強制通用のある紙幣のように，流通にとどまることを強制されたものであるならば（そしてリカードが考えているのはこれである）」という文言がこれを示している。そしてこの場合，リカードにおいては，この過剰紙幣は，W－G－Wの動的統一のからみ合いにおいて，流通する。「貨幣価値の低下は，リカードの教えてくれるところでは，過剰な流通（übervoller Zirkulation）から生じる」[49]。またこの過剰紙幣は「一般の商品価格が……騰貴してしまえば……流通の需要にふたたび照応することになろう（これはリカードがとくに満足して力説した帰結である）」とも考えられているのである。

以上のように，リカードの価値章標論[50]を，それが妥当する固有の流通領域，紙幣流通に制限した場合には，これまでのインフレーション研究者によって，常識として受け入れられてきたマルクス紙幣流通法則の解釈と基本的に同一なのである。だがここに，リカード価値章標論は，したがってまたマルクス紙幣流通法則の従来の理解は，致命的な欠陥をもつ。すなわち紙幣を，「一面的に」，「金に対する紙幣の代表関係」において規定するだけで，「商品価値に対する紙幣の関係」　商品価格＝紙幣　の関係においては，全然規定していないからである。従ってまた，紙幣を，価値尺度機能の媒介による両者の統一において規定していないからである。そしてここから金廃貨と数量説の幻想が生じる。

49）同上，244ページ。

50）ここで次の点を注意しておきたい。マルクスは，リカード説を，リカードの「内面的な表明をたどる」という仕方で，説明している。その際，マルクスは，本文引用の中で，「金は，それ自身の価値をもっているにもかかわらず…それ自身の価値よりも低い交換価値をもつ金属の章標となり」と，リカードの根本矛盾を突いた上で，この場合の物価騰貴を，本文の最初の方に挿入した私の注釈とも関連して，「諸商品が金よりも低い価値をもつ金属で評価されたのと同じことになろう」，あるいは「諸商品が一般的に貨幣のこの新しい価値で評価され，一般の商品価格がそれに応じて騰貴…してしまえば」と述べている。つまりこの場合の物価騰貴を貨幣数量の増加からではなく，また度量標準の問題でもなく，価値尺度の変更，あるいは価値尺度の価値の変化から説明しているのである。これは，マルクス自身が，彼の紙幣流通法則において，物価騰貴を，度量標準問題ではなく，価値尺度の問題として，従って金価値低下と共通の価値法則の問題として把握していることを，リカード説を「内面的にたど」る説明の中で，表出していると見ることができるであろう。何故なら，リカードには，貨幣に独自な機能としての価値尺度は自覚されていないからである。自覚されているならば数量説にはならない。

ついでに言えば，このリカード数量説に対するマルクスの批判が，難解なのは，読む側がマルクス紙幣流通法則をリカード価値章標論と同一の内容においてあらかじめ解釈している点を除くと，およそ学校教師風ではないこの「内面的にたどる」方法によって，マルクス自身の紙幣流通法則についての見解が流出し，どれがリカードの見解で，どれがマルクスの見解かが，一見しては判別できない所にあると思われる。とは言え，この流出によって，マルクスの見解を，一層ふかく理解することができるのであるが。

第2節　金廃貨・数量説

そこでこの検討に入る。

次の引用において，マルクスは，最初に，紙幣を金に対する関係において，金章標と規定し，次に，角度を変えて，商品に対する関係において，価格章標と規定する。その上で，紙幣が媒介する商品メタモルフォーゼに独自の外観，すなわち右辺の紙幣が左辺の商品の価値を直接に代表する　商品＝紙幣　の幻想の同等性関係（価格章標の反対物）が成立することを，金が過程を媒介する場合との対比において，説明する。

「鋳貨として機能する価値章標，たとえば紙券は，その鋳貨名に表現されている金量の章標であり，したがって金章標である。一定量の金それ自身が価値関係を表現しないのと同じように，それにとって代わる価値章標も価値関係を表現しない。一定量の金が対象化された労働時間として一定量の価値の大きさをもつかぎりでは，金章標は価値を代表している。諸商品に対しては，価値章標はそれらの価格の実在性を代表するのであって，signum pretii 価格の章標である。それが諸商品の価値の章標であるのは，諸商品の価値が価格に表現されているからに他ならない。過程W－G－Wでは，この過程が二つの変態のたんに過程的な統一または直接的な相互転化として現れるかぎり――そして価値章標が機能する流通部面では，それはこのようなものとして現れるのだが――，諸商品の交換価値は，価格ではたんに観念的な存在を，貨幣〔紙幣〕ではたんに表象された象徴的な存在を受け取る。こうして交換価値は，ただ考えられたもの，または物的に表象されたもの〔例えば千円札〕としてだけ現れるのであるが，しかしそれは，一定量の労働時間が諸商品に対象化されているかぎり，それらの諸商品そのもののほかには，なんらの現実性をももたない〔実在的価値姿態である金という現実性をもたない〕のである。だから価値章標は，金の章標としては現れないで，価格に表現されているだけで，ただ諸商品のうちにだけ存在する交換価値の章標として現れることによって，商品の価値を直接に代表しているかのように見える。だがこういう外観は誤りである。価値章標は，直接にはただ価格章標であり，したがって金章標であり，ただ回り道をして商品の価値の章標であるにすぎない」[51]。

紙幣が媒介するW－G－Wの動的統一の過程では，金がこれを媒介する場合と違って，価値は実在的価値姿態である金という現実性をもたない。この過程には「固い価値結晶（feste Wertkristall）」[52] は存在しない。価値の現実性は，商品における価値存在として，商品その物の内部にとどまり続ける。そして，その伝統的な反重金主義と，商品の観念的価値形態つまり価格形態を「まったくどうでもよいものとして，または商品そのものの本性には外的なものとして取り扱う」古典派経済学に一般的な研究態度とによって，この事実を観察する時，W－G－Wの動的統一の過程における商品と紙幣との関係は，ただ単に，異なった素材である商品と紙

51）『経済学批判』訳，148－149ページ，傍点ならびに〔　〕内引用者，圏点はマルクス。

52）『資本論』第Ⅰ巻，訳，148ページ。

幣との等置の関係として，商品＝紙幣　と観念され，右辺の紙幣は左辺の商品自体の中に現実性をもつ価値を，直接に代表しているかのように見える。すなわち井汲明夫氏の「紙幣量価格」[53]，岩井克人氏の「紙幣と商品との等価関係」[54]が成立しているように見える。しかしながら，「こういう外観は誤りである」。この過程における商品と紙幣との現実の関係は，　商品価格＝紙幣　であり，右辺の紙幣は，左辺の価格の実在性を代表しているのであって，価値を代表しているのではない。この等式において，紙幣は「直接にはただ価格章標であり」，価格が価値を表現する媒介を通じてのみ，「商品の価値の章標であるにすぎない」のである。

右辺の紙幣が左辺の価格の実在性を代表する　商品価格＝紙幣　の現実の同等性関係が，右辺の紙幣が左辺の商品価値を直接に代表する　商品＝紙幣　の幻想の同等性関係に転換される「このことから，貨幣流通の諸現象を一面的に〔リカードのように，また従来の日本のインフレーション研究者のように，紙幣を金との代表関係においてのみ――後者の場合，貨幣流通の内在的法則をすべて誤解したとはいえないが――〕強制通用力をもつ紙幣の流通に即して研究した観察者たちが，なぜ貨幣流通のすべての内在的法則を誤解せざるを得なかったかが明かとなる」[55]。なぜなら　商品＝紙幣　は，価格をもたない商品と内在的価値をもたない貨幣との「頭のなかででっちあげられた機械的等置」として,貨幣数量説と金廃貨論のエッセンスだからである。この等式こそ，貨幣についてのあらゆる無知蒙昧主義の源泉であって，価値関係の否定，従って数量説と金廃貨を表示するこの等式に立脚して，貨幣流通の諸現象について判断を下すが故に，井汲・岩井両氏を典型的代表とする金廃貨論者は，価格が流通手段の数量を規定し，金は観念的価値尺度として貨幣の第１規定であるという命題を主要な柱とする貨幣流通の諸法則は，「ただ逆さま」[56]である「だけではなく，消え去った」[57]とする，ヒューム・リカード流の独断論におちいるのである。

商品＝紙幣　の等式においては，商品が使用価値と価値との二重物であるところから，価格について，次のような数量説の二つの基本型の妄想が展開される。ヒュームタイプ（彼においては価値をもたない金であるが)。左辺の商品の使用価値の物理的数量と，右辺の価値をもたない金量との，「ただそれらの相関的な量」[58]として，同じことだが，左辺の使用価値の数量と右辺の紙幣数量との「相関的な量」として，価格が考えられる。リカードタイプ。以下では左辺を一定として説明する。左辺の商品の一定価値量に対する右辺の紙幣数量の割合として，価格か意識される。そして「金に対する〔紙幣〕の適当な比率の侵害」[59]が生じた場合，その侵

53）井汲氏前掲論文，71ページ。
54）岩井氏前掲書，118ページ。
55）『経済学批判』訳，158ページ。〔　〕内引用者。
56）同上。
57）同上。
58）同上，215ページ。
59）同上，158ページ。

害の度合に応じて，左辺の商品の一定価値量に対する右辺の紙幣数量の割り当て量が変動するという形で，変動した価格が観念される。もう少し説明を加えると，左辺の商品の一定価値量に対する右辺の紙幣の正しい割当量を上下に越える紙幣量の割当比率として，変動した価格が考えられる（通貨学派，すなわちヒューム理論の「究極の帰結」[60]は，この正しい紙幣量の割当水準からの紙幣量の上下乖離を極端な形でもたらすのが，イングランド銀行の信用創造にもとづく銀行券発行だと考えた――だからここには信用と通貨との混同があるのだが，ここでは立入らない――。そしてこれを，為替相場の変動にもとづく金流出入によって，商品価値に対する銀行券の正しい割当量をもたらすべく，人為的にコントロールすべきと主張し，かつ実行したのであった。言うまでもなく，この幻想的価格理論は実践的に批判された）。そしてこの思考が金属流通に対しても拡張されると，すなわち　商品＝紙幣＝実在的貴金属貨幣　と考えられると，「およそ貨幣として役だつ貴金属のどんな量も，その貴金属の内在的価値に対する割合がどうであろうと，つねに流通手段，鋳貨にならなければならず，したがって，流通する諸商品の価値総額がどれほどであろうと，諸商品の価値章標とならなければならない」[61]ということになる。貴金属は，その数量がどれほどであろうと，また貴金属の内在的価値に対するその割合がどうであろうと，価格の媒介なしに，直接的に，左辺にある対極の商品価値に割り当てられる代表者とならなければならないと考えられることになる（先の通貨学派は，正に，「そのときどきに現在する金と同量の鋳貨を流通させようとする実際上の実験」[62]を行い，失敗したのであった）。言い換えれば，この数量説の価格理論においては，貨幣の観念的価値尺度機能と貨幣蓄蔵を含む第3規定の貨幣がすべて否定され，貨幣を流通手段としての機能に孤立させるのである。

第3節　井汲明夫・岩井克人・田中素香，三氏の所説の批判

ここで上記三氏の幻想的流通理論を批判しておきたい。

過剰流通説が，それを金との関係において主張するのに対して，井汲氏の紙幣量価格説は，それを商品との関係において主張する。これによって両説は互いに補い合う関係に立つ。また前章で明らかにしたように，過剰流通説は，商品との関係では，商品＝紙幣　を想定する。だから，この説は，向きを変えれば，紙幣量価格説に急変する。

紙幣量価格説は，商品＝紙幣　を内容とすることによって，次の帰結となる。第1。左辺の商品は，その価値存在を，右辺の紙幣との同等性関係によって，どのように表現するか？，すなわち左辺の商品は，その価値存在を，無との同等性によって，いかにして現出させるかという神秘的な設問。井汲氏は，この解決不能の問題に直面して，次のように考えているものと思

60）同上，247ページ。
61）同上，230ページ，傍点引用者。
62）同上，246ページ。圏点はマルクス。

われる。他の二者とちがって明確な価値概念をもつ氏には，いとも簡単にそう考える田中氏のように，無価値な紙幣が価値尺度機能を果たすとは，直接には，どうしても言えない。他方，氏は，紙幣が購買手段として商品価格を実現することによって，商品に転換している事実を，価格規定の媒介なしに，一定数量の紙幣と一定数量の使用価値との「直接的な交換」[63] と言う素材的関係において，紙幣の一定量＝商品の一定量　として，ミルと同様の仕方[64] で，観念している。そこでこの　紙幣量＝商品量　の関係全体を丸ごと，商品がその価値を表現するために，自己の右辺に観念的に等置する。商品量＝紙幣量＝商品量　（あらかじめ述べておくと，この三者の等置方程式が岩井克人氏の貨幣形態Ｚのエッセンスである。だから井汲氏は岩井理論の先行者とも言うべき功績をもあげられているのである）。この関係において，左辺の商品は，右辺の一定量の商品を紙幣の一定量を媒介に購買しうるものとして，「実践的」[65] に価値尺度している。この場合，中間項の一定紙幣量に対する，右辺の商品の使用価値量の割当比率が，紙幣の購買力として，貨幣の価値規定となる。結局，紙幣の実践的な価値尺度機能とは，左辺の商品価値を表現するのではなく，左辺の一定商品量に対する購買力としての紙幣数量の割当比率だということになる。

ショーウィンドウの中にあるすべての種類の商品体の額には，観念的貨幣量をアラビア数字で書き込まれた白いラベルが宿命的に張りつけられている。１本のウイスキー＝2,000円　４切れのサーモンの燻製＝1,600円　　300ｇのチーズ＝1,200円　等々。このショーウィンドウの内側のすべての商品体に記入してある観念的貨幣量すなわちそれらの価値形態は，ショーウィンドウの外側に立って，これらを眺めている私のポケットのなかなにある実在的貨幣量が，そこに示されている比率にもとづいて，それらすべての商品体に，いつでも私の決意しだいで，転換できるという力能の観念的表現でもある。すなわち，ショーウインドウの内側の値札を貨幣の側から読んだ　2,000円＝１本のウイスキー　　1,600円＝４切れのサーモンの燻製　1,200円＝300ｇのチーズ　等々は，つまり「貨幣商品の独自な相対的価値形態」[66] は，その外側の私のポケットの中にある実在的貨幣量が，その量的限界の内部で，これらの比率において，私の欲望のおもむくままに，ウィンドウの中のすべての商品に転換できるという実在的貨幣の使用価値の観念的表現なのである。「金材料は実在的には交換価値である。その使用価値は，その実在の使用姿態の全範囲として対立する諸商品にそれを関係させる一連の相対的価値表現において，ただ観念的に現れている」[67]。

63）『経済学批判』訳，242ページ。

64）ミルにおいては「諸商品と貨幣との直接的な対置とその直接的な交換というこの考え方全体は，単純な売買の運動から，すなわち購買手段としての貨幣の機能から引き出されたものである」（同上）。

65）同氏前掲論文，100ページ。

66）『資本論』第Ｉ巻，訳，126ページ。

67）同上，訳，139ページ。傍点引用者。

井汲氏は,ウィンドウの外に立ってその中を見ている人の，ポケットにある実在的貨幣の使用価値の観念的表現，例えば，ウィンドウの内側にある　2,000円＝1本のウイスキー　を，2,000円という価格規定を脱落させて，ミルと同様に，ポケットの中にある1,000円紙幣2枚に「直接的に対置する」[68]。ショーウィンドウを破壊するのである。　1,000円紙幣2枚＝1本のウイスキー　すなわち価格表を逆に読む仕方で現実に与えられている実在的貨幣の何でも買えるという力能の観念的表現を，ポケットの中にある実在的紙幣量に対する実在的商品量の割当比率という非現実的な比率に置き換えるのである。そしてその上で，この比率を購買力，あるいは「貨幣の，貨幣としての価値」[69] と規定する。「直接的交換可能性たる貨幣は自らの使用価値の一定量で，自らが転化することの出来る諸商品の諸々の量を表現しており，これが価値体たる貨幣の価値である」[70]。「貨幣の貨幣としての価値とは他商品との交換比率，いわゆる「購買力」である」[71]。これは，すなわちヒュームの見解に他ならない。「彼［ヒューム］は……価格をもたない商品と価値をもたない金銀とを流通過程に入りこませる。だから彼はまた，商品の価値と金の価値とについては全然論じないで，ただそれらの相関的な量についてだけ論じるのである。……金銀は価値の無いものであるが，しかし流通過程の内部では諸商品の代表者として一つの擬制的な価値の大きさを得る。……金銀のこの価値は，それ自身の量と商品量との間の比率によって規定される。なぜならば，両者の量は互いに一致しなければならないからである」[72]。ヒュームにとっては「計算貨幣と流通手段とは同じものであって，両者とも鋳貨(coin)である」[73]。井汲氏にあっては,両者とも紙幣である。そしてこの幻想的結論は，もともと，商品＝紙幣　として与えられていたのである。　商品＝紙幣　も　紙幣＝商品　も　商品＝紙幣＝商品　も，すべて価格規定を脱落させている点で，数量説に帰着するのである。

第2。現在の商品価格は紙幣量価格であると言う途方も無い主張。もしそうならば，紙幣は自己価値ゼロであるから，ゼロの倍数はすべてゼロであることによって，商品世界はその価値がすべてゼロで均等であり，かつ変動しないことになる。つまり価格ゼロの主張。もしここで，氏が上記の，商品量＝紙幣量＝商品量　にもとづいて，左辺の商品の価値は，結局，右辺の商品の使用価値で表現されているのだと言われても，事柄は変わらない。紙幣はこの方程式における不可欠の中間項だからである。それとも中間の紙幣は無だから，我々は物々交換の世界にいるとでも言われるのであろうか。結局，井汲氏の場合，幻想的な数量説か価格ゼロ説しかないであろう。

68）『経済学批判』訳，242ページ。
69）同氏前掲論文，85ページ。
70）同上。
71）同上，86ページ。
72）『経済学批判』訳，215－216ページ。
73）同上，214ページ。

第３。我々が商品に対面して所有している紙幣は，紙幣量価格の章標である。つまり紙幣は紙幣の章標であるという同義反復。

Ｗ－Ｇ－Ｗの流動的統一においては，Ｇは金実体を持たない「仮象の金」として機能する。それ故，この物質的定在を吸収した貨幣名目を持つだけの「仮象の金」は，それと同一名目を印刷してあるだけの無価値な紙幣によって代理できる。しかしそれと同時に，紙幣は，この代理関係においてのみ価値をもつ。すなわち流通手段としての貨幣の「観念的な数的関係」においてのみ，したがってまた，購買手段として，それと同一の商品価格を実現する仕方で流通することによってのみ，紙幣は価値を持つ。このことを，マルクスは「紙幣は流通するから価値をもつ」と言う。しかし，この命題を，岩井克人氏は，価値形態論の「悠久千年の争いに明快な決着をつける」という鳴り物入りの宣伝で，氏が発表した貨幣形態Ｚなるものと同一だと，頓珍漢に言う（同氏『貨幣論』119－122ページ)。すなわち氏は，ここで，紙幣が媒介する商品流通を価格規定を脱落させて，素材的に観察した上で，この流通過程を，　商品＝紙幣＝商品　の幻想的形態で理解し，そしてこれを，価値形態の展開と混同していることを，自ら告白しているのである。氏はこのＺなるものは次のものだと言う。「貨幣とは，全体的な相対的価値形態と一般的な等価形態という二つの役割を同時に演じている、いや演じさせられている存在である。……商品が貨幣に与える直接的交換可能性〔直接的交換可能性を与えられているものが貨幣であるから，直接的交換可能性に対して直接的交換可能性が更に与えられる？〕と貨幣が商品に与える直接的交換可能性〔直接的交換可能性をもつものが，商品に直接的交換可能性を与え，かくして商品が貨幣となる？　貨幣と商品との関係が貨幣と貨幣との関係になる?〕とが宙づり的な相互依存関係になっている」（同氏，54－57ページ,〔　〕内引用者)。すなわちＺにおいては，商品所有者は，彼の商品を，貨幣所有者がそれを欲望するかしないかにかかわりなく，貨幣所有者に対して譲渡すると決意しさえすれば，商品世界において，いつでもどこでも任意に，すべての貨幣所有者のポケットから，商品と引き換えに，貨幣をひきだすことができる。なぜなら，彼のも含むすべての商品は貨幣に対する直接的交換可能性をもち，商品は貨幣を買う「goods buy money」（同氏，58ページ，脚注３より）からである。市場におけるどの個別取引においてさえも，商品の貨幣に対する直接的交換可能性により，販売不能性はあり得ないとする，ジェムズ・ミルを赤面させ，prince de la science をも跪づかせるウルトラセイ法則,これが究極のＺである。

右足が沈む前に左足を踏み出し，左足が沈む前に右足を踏み出せば，水面を歩くことができる。なぜなら右足と左足とは，水面で，相互に相手を支え合う「宙づり的」関係を構成するからである。これをまともに信用して，水面を歩くことを決意されたのが田中素香氏である。「岩井は貨幣形態Ｚの開発を通じて，貨幣を貨幣たらしめる論理をきわめて明確に提示するこ

とができた。これをわれわれは高く評価したい。これによって今ではもう妥当しないマルクス流の紙幣減価論を捨てて，正しい視角からインフレーションを考察していくための基礎理論が提起されたと考えるからである」[74]。

氏の理論については，その思想内容を余すことなく示す次の氏の等式に関して，くり返しを厭わず2点述べておきたい。

20エレのリンネル　＝	
一着の上着　＝	
10ポンドの茶　＝	
40ポンドのコーヒー＝	1ポンド・スターリング――不換銀行券
1クオーターの小麦＝	
半トンの鉄　＝	
4分の1オンスの金＝	（同氏，前掲論文　39ページ）。

第1。この等式，すなわち価格をもたない左辺の諸商品群と内在的価値をもたない右辺の1ポンド・スターリング不換銀行券との同等性関係，つまり　商品＝紙幣　は，この世には存在しない。これは氏の頭の中にのみ存在する数量説の幻想である。

第2。左辺の諸商品群の諸々の数量（これは商品世界を構成する）に対する右辺の1ポンド・スターリング不換銀行券の割り当て比率，氏が考えている価格つまり数量説の価格，これは右辺の不換銀行券数量が増加すれば騰貴し，減少すれば下落する。この場合，価格騰貴は，同時に，右辺の1ポンド・スターリング不換銀行券に対する左辺の諸使用価値数量の割当比率の減少，つまりその購買力の減少であり，価格低下はその増大である。すなわち商品価格の上下変動と貨幣購買力の増減とは，この等式が示す同一の関係を，左辺の商品の側から見るか，右辺の貨幣の側から見るかの視点の違いによって与えられ，1個同一の内容をもつ。だから貨幣購買力の増減と商品価格変動との関係を，原因と結果の関係とみなすことはできない。そう考えるならば，氏は正にそう考えるのだが[75]，「同義反復を因果関係に変える」[76]ことになる。そしてこの quid proquo こそ，ヒューム理論の letzten Konsequentz であった。そしてこれは実践的に破産したのであった。紙幣購買力すなわち「すべての商品と比較しての貨幣の相対的価値」[77]の激しい増減によって激烈な物価の上下変動が生じる。紙幣購買力の増減は，リカー

74）同氏前掲論文，49ページ。

75）「不換銀行券の減価はもはや金に対しては現れず，金を含めた諸商品に対して，その購買力の減少として現れるのである。これが，銀行券で測った物価水準の上昇，つまりインフレーションである」（同氏，前掲論文，39ページ）。

76）『経済学批判』訳，244ページ。

77）同上，訳，243ページ。

ドの教えるところでは，紙幣の過剰流通あるいはその不足によって生じる。そこで，この過剰流通あるいは不足を地金の流出入にもとづいて，イングランド銀行がその銀行券発行量を人為的にコントロールすることによって調節すれば，物価の上下変動を，暴力的な形態から穏やかな形態に変えることができる。だがこれはかえって全くの逆効果であった[78]。

第3章　紙幣の物神性

貨幣名目を印刷してあるだけの単なる紙片が貨幣であるのは，紙片が，W－G－Wの過程的統一において行われる商品変態の中間項として，貨幣名目を持つだけの「仮象の金」との代表関係で，それとの「観念的な数的関係」において，金章標と規定されるからであり，また，それが，この中間項の位置で，商品価格＝紙幣　の関係において，左辺の価格の実在性を代表するものとして，価格の章標と規定されるからである。この二重の規定性において，単なる紙片は，金章標として第2規定の貨幣となる。

78）氏が『資本論』を現実問題解明の理論として，誠実に研究されることを期待し，次の三点を述べておきたい。第1。価格の概念は，価格をもたない商品数量と価値をもたない貨幣数量との「頭の中ででっちあげられた機械的等置」ではなく，諸商品の価値存在を金との同等性関係によって観念的に表現したものであること。価値形態論の専門と称する人に限って次のことを理解していないのであるが，マルクス価値形態論は，ブルジョア経済学の全基礎である貨幣数量説の批判を一つの精髄とすること。解説的に言えば，「商品は，価格として措定されれば，現実に貨幣と交換される前にすでに観念的に貨幣と交換されている，という単純な規定からは，おのずから，流通媒体の量は諸価格によって規定されているのであってその逆ではない，という重要な経済法則が生じる」（『マルクス・エンゲルス全集』第29巻，大月書店版，248ページ）。この，商品の「観念的に貨幣と交換されている」関係の分析によって，価格すなわち商品の貨幣形態を解明したものが価値形態論であること。第2。氏はこの論文において交換過程の矛盾を次のものと理解する。「鉄の所有者は小麦を欲しいのに小麦の所有者は鉄を欲していないがゆえに商品交換が成立しないという交換過程の矛盾」（同氏，41ページ）。これは交換過程の矛盾ではない。この関係においては，小麦は，鉄所有者の欲望の対象であり，社会的使用価値の資格において，それに対象化された労働は価値としてカウントされる。かくして小麦は，使用価値と価値との直接的統一として，商品の矛盾を交換過程において展開するものとして存在している。しかし鉄はそうではない。鉄は，ここでは他者にとって全く無用であり，従ってそれに対象化された労働は価値としてカウントされない。鉄は社会的使用価値も価値もともにもたないのである。それゆえ，鉄は，ここで，商品の使用価値としての実現と価値としての実現との間の矛盾を展開するものとしては，存在していない。交換過程の矛盾は，ジェヴオンズの交換のためには「欲望の二重の一致」がなければならないという通俗的なものではなく，この過程に登場するすべての商品が，上述の矛盾を展開し，その媒介物たる貨幣を必然とする矛盾である。第3。氏の立論の根底にあるものは，多くの研究者に共通した誤解，すなわち一般的直接的交換可能性と一般的交換手段との混同である。これについては次の区別と関連とが正確に把握されねばならない。諸商品の価値表現における社会的共同行為によって，金に対して一般的直接的交換可能性が観念的に与えられる。これによってはじめて，金は実在物として一般的交換手段（貨幣の使用価値）の性格をもつ。そしてこの力能は，貨幣の独自な相対的価値形態において，貨幣の価値表現とは別個に，観念的に表現される。

この商品変態の全過程において，金は実在的価値姿態としては姿を現さない。しかしこのことは，ここで果たされている金の諸機能からの必然であって，決して金が廃貨されたことを意味しない。すなわち，金は，価値尺度としての価格付与においては，観念的な金として機能することがその本質的な規定性であり，流通手段としては，最軽量目規定の存在が証明するように，貨幣名目を持つだけの「仮象の金」として機能するにすぎず，その機能的定在にとっては，貨幣の「物質的実体」は非本質的だからである。ここでは，金が貨幣であることは，この過程で果たしてしている金の諸機能が，三宅氏の主張（前掲書75，91ページ）とは正反対に，麻痺するのではなく，かえって独自の仕方で生き生きと機能するという形で実証される。すなわち，紙幣の発行量がそれが代理しうる金量を越えるならば，紙幣は「仮象の金」の代理物としてのみ流通手段として機能しうるだけだという規定性の貫徹によって，減価し，この減価は，反作用的に，価値尺度規定における貨幣名の金量減少をもたらし，そしてこの金量減少に基づく低下した価値をもつ貨幣単位名による価値尺度機能の働きによって，商品に騰貴した価格規定が付与される。そしてこれによって，紙幣は，この価格を実現すべきものとしての価格の章標の規定を受け取る。こういう仕方で実証されるのである。つまりインフレーションがこれを証明するのである。もしこれを認めないならば，不換制に独自の持続的累積的物価騰貴という現実を，一個の法則の問題として解明することを放棄することになろう。この物価騰貴は，新古典派などの単なる需給論では説明不能であり，また金廃貨論が否応なしにそこに帰着する観念的度量単位説によっては，もちろん説明できない。そして数量説は幻想なのである。ましてや，兌換制下の物価の上下波動を伴うそれの趨勢的低下と，不換制下の物価の持続的累積的騰貴との対照的価格変動を，統一的に説明することは，これらによっては，とうてい及びもつかないのである。

専一的紙幣流通においては，商品の流通過程に，実在的価値姿態としての金が現れないのは，それが正に，紙幣が流通していることによって当然である。この過程では，金は，単なる紙片を貨幣たらしめることによって，自らは姿を現さないのである。この過程において数量説と金廃貨の外観が生じるけれども，それは正に外観にすぎない。それを真実と思いこませるものは，紙幣流通を，ただ素材的に観察する者の頭脳の中にのみ生じる，すでに説明した幻想の同等性関係　商品＝紙幣　である。この等式にもとづいて，貨幣流通について判断するが故に，リカードやヒュームと同様に，「貨幣流通のすべての内在的法則」を「逆さま」であるばかりでなく，「消え去った」と独断するのである。

専一的紙幣流通の体制つまり不換制は，資本主義諸国において，第2次世界大戦後に制度化したと考えられる。この体制の下で，商品流通についての多くの観察者は，商品の形態変換をただ単に素材的に観察する。すなわち普通の商品と紙幣との交換として。商品と紙幣との交換というこの素材的契機だけに固執するならば，まさに見るべきもの，すなわち形態の上に起きるものを見落とすことになる。紙幣はただの紙片としては金章標でもなければ価格の章標でも

ないということ，そして諸商品は，その価格において，価格の実在性を代表するものとしての紙幣に，自らを，　商品価格＝紙幣　として関係させているということを，見落とすのである。すなわち，価格をもつ商品が，販売において使用価値の姿を脱皮し，価格の実在性を代表するものとしての紙幣に変態し，そしてこの紙幣の姿から，それと同一の価格をもつ別の商品に変態してゆく，紙幣を媒介すとする商品自身のメタモルフォーゼの全プロセスを見失うのである[79]。この事実の見落としによって，彼等は，商品と紙幣との関係を，右辺の紙幣が左辺の商品価値を直接に代表する，幻想の同等性関係　商品＝紙幣　として把握する。半世紀を越える日常生活での商品と紙幣との交換のくり返しの中で，この幻想の同等性関係が頭の中でのみ骨化する。この結果，単なる紙片は，そこに貨幣名目を印刷してあるだけで，「それ自身に独立した存在をもつものとして」[80]商品に対立することができ，貨幣として機能することができるとする神秘的観念が形成される。この観念を，紙幣に対する物神崇拝と規定できるであろう。そしてこの紙幣物神にとりつかれた人が，貨幣について，「貨幣が貨幣であるのは，それが貨幣であるからなのである」[81]とか，「無限の循環論法」[82]とか，「宙づり的な関係」[83]とか，「奇跡」[84]や「神秘」[85]と，本気になって，語るのである。彼が，無器用に，関係性として，何んとかつかまえた紙幣の貨幣としての規定性が，突然に，貨幣名目を持つだけの紙片それ自体の素材的性格において，無として現れることから，すなわち，観念的な価値尺度としての貨幣の機能にとっては，貨幣の「物質的な実態」が本質的であるのに，商品と並んで実在的貨幣として機能する流通手段においては，名目量同士の「観念的な数的関係」にすべてがかかり，実在的貨幣の「物質的な実態」はどうでもよいという，常識に矛盾する構造が存在することから，これを「神秘」や「奇跡」といって，素朴に仰天するのである。しかしこの驚愕に，紙幣物神にとりつかれていることの，素直な告白が示されているのである。

おわりに

最後に，不換制を，紙幣流通法則に立脚して，国家の経済過程への恒常的介入システムを内容とする生産関係として把握する場合に，重要と思われる相互に密接に関連する３つの問題を

79）『資本論』第Ｉ巻，訳，138－139ページ，久留間鮫造『貨幣論』（大月書店，1979年）241-245ページ参照。
80）久留間鮫造『増補新版恐慌論研究』（大月書店，1965年）186ページ。
81）岩井克人前掲書，64ページ。
82）同上，97ページ等。
83）同上，54ページ等。
84）同上，143ページ等。
85）同上等。

指摘して，本稿の結びとしたい。第1。紙幣の過剰投入をもたらす国家の「機械的行為」[86]を，市場のエレメントとして，そもそもどのように位置づけうるか。これは，銀行組織と貨幣市場とを捨象した抽象的段階とそれらを導入した具体的段階との二段階で考えられねばならぬと思われる。前者のレベルでこの問題を表現し直せば次のように設定しうるであろう。紙幣がそれに代理しうるW－G－Wの過程的統一におけるGの位置は，販売と購買との連結中間項として，またW－GとG－Wとの無限の連鎖の悪循環過程の中間項として，入り口も出口もない流通の密室空間を構成している。では，いったいぜんたい，このW－G－Wの流動的統一の中間項に，どのようにして過剰紙幣が入り込んだのか？　マルクスは入り込んだと仮定して，紙幣流通に独自な法則の貫徹をそれ自身において，経済の実体的諸要因の水準が一定不変のもとで，名目的物価騰貴をもたらすものとして，説明しているのである。フリードマンのヘリコプターマネーは，学史的に言えば，この問に答えられぬことから来る空想的解決でしかない。したがってこの密室のミステリーにまずもって解答が与えられねばならない。この謎の解決は，私の考える所では，マルクスにもとづいてのみ可能であり，それは，また同時に，流通理論における重金（重商）主義対古典派の現在にまで続く「抽象的対立」，すなわち第3規定の貨幣を資本と混同しつつ，貨幣は経済実体に規定的な作用を及ぼすと主張する貨幣的経済理論と，貨幣は，単なる形式的な流通媒介物として，経済実体には何んらの作用も及ぼさない，貨幣はそれをおおう単なる包み紙のようなものだと主張する貨幣ヴェール観との対抗を，相互に補完しあう対立的な貨幣理論として，最終的に総括する意義をもつものと思われる[87]。具体的段階の問題。不換制は，資本主義の貨幣制度として完成を見た兌換制の崩壊によったもたらされ，制度化したものである。この場合，不換制にとっては，中央銀行を頂点とする銀行組織と貨幣市場とは所与である。言い換えれば，貨幣は，単に商品メタモルフオーゼとの関係で与えられる貨幣そのものの抽象的諸規定の他に，貨幣資本の二側面（Geld als Kapital·Kapital als Geld）[88]ならびに所得の貨幣形態（この貨幣運動は所得の運動に規定される），そして利子生み資本としての貨幣という高次の規定性をも与えられて，具体的に存在していた。したがって紙幣流通法則は，これら高次の貨幣の諸規定との関係において，具体的に理解される必要があると思われる。すなわち紙幣流通法則は「経済学的諸範疇の全体系とのあいだの生きた関連」[89]で把握されねばならぬと考えられる。

第2。その「機械的行為」によって紙幣投入を行う，ないしはそれを決意する主体である国家それ自身の問題。G－W－G′という，資本としての貨幣（Geld als Kapital）の流通形態

86）『経済学批判』訳，155ページ。

87）前掲拙稿「インフレーションの進行過程について—有効需要政策の意義と限界—」参照。

88）伊藤武編著　鶴野昌孝・前畑雪彦著『貨幣と銀行の理論』（第2版，1995年）「第2編　資本の流通過程と貨幣資本」参照。

89）『経済学批判』訳，248ページ。

によって支配的に規定されている資本主義的生産有機体は，この資本の価値増殖運動がそれ自体においては国境を持たないにもかかわらず，「商品所有者たちの一般的意志」[90] の代表者である国家によって統轄され，1国国民経済として，現に，構築されている。そして世界市場における諸資本間の競争は，国内市場での競争とちがって，我々が日々目撃するように，国家対国家の対立を不可欠の媒介契機として行われている。この国民経済の内部に対するその統轄者としての国家と，世界市場での競争戦における他の国家に対する国家との，二つの側面をもつ国家が，その経済的役割において正確に認識される必要がある[91] と考えられる。

第3。この国家の二つの側面と深くかかわって，国際的な貨幣関係のあり方としての，第2次世界大戦後の金・ドル交換を基礎とする固定相場制とこれの崩壊としての現在の変動相場，そしてこれらの下で，金属流通の時代から一貫して存在し続けている金市場と金価格の変動，これらが，以上において具体的に把握された紙幣流通法則と，そしてマルクス世界貨幣論に立脚して，また上記の二つの側面をもつ国家の役割との関連において，どのような内容において必然的なものとして相互に位置づけうるのか。そしてこのようにして把握された現代資本主義の，米国国家を中軸とする諸国家間の関係を不可欠の媒介契機とする貨幣の国際的連関（いわゆる「金本位制」下では，金平価にもとづいて自然的に貨幣の国際的連関が形成されるのであって，このような諸国家間の関係は不可欠の契機ではない）には，世界変革のためのどのような新しい条件が用意されているのか。

常に暖かく配慮してくださったマルクス思想史家 David McLellan 教授に感謝を捧げる。

カンタベリー市ケント大学にて。

1997年10月27日。

90）同上，訳，149ページ。

91）久留間鮫造『マルクス経済学レキシコンの栞』（大月書店，1995年）所収，No.5. 1971年12月，3－4ページ，参照。